

授業の遠隔化で授業アンケート結果は変わったか

新型コロナウイルス感染症問題に伴い、2020年度は授業者にとっても大変苦勞の多い年となりました。前期のほとんどの授業が遠隔化された結果、先生方におかれましては、慣れないパソコン作業、慣れないシステム活用、慣れない遠隔授業実践と困難の連続であったと思います。今後の社会情勢も予断を許さない状況ではありますが、いかなる状況下にあったとしても、よりよい教育・授業を実現していくお手伝いができるよう、教育開発支援センターとしても調査・研究を進めております。

その一環として今回は、2019年前期（対面授業）と2020年前期（遠隔授業）の授業アンケート結果を比較し、どのような差がみられたかを分析しました。結果は表の通りです。なお、アンケートの回収率は2019年で59.4%、2020年は45.3%と低下しており、単純比較が難しいことをお含みおきください。

授業アンケート項目	2019年前期		2020年前期		2020-2019年の比較	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点差	有意差
私は、この授業の内容をよく理解できた。	4.17	0.40	4.18	0.37	0.01	
私は、この授業の内容に興味・関心が持てた。	4.20	0.42	4.25	0.36	0.05	
私は、この授業をまじめに、意欲を持って受講した。	4.30	0.32	4.39	0.31	0.09	***
教員は、シラバスに沿って計画どおり授業を行った。	4.34	0.33	4.35	0.32	0.01	*
教員は、十分な準備を行い授業を進めた。	4.35	0.34	4.41	0.36	0.06	
教員は、理解を促したり考えさせたりするための工夫を行った。	4.32	0.37	4.33	0.40	0.01	
教員は、授業外での学修方法(資料・課題など)を明確に示した。	4.20	0.39	4.30	0.37	0.10	***
総合的に見て、この授業を受講してよかった。	4.26	0.40	4.32	0.39	0.06	

アンケートは各項目5件法（とてもそう思う、まあそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、まったくそう思わない）で尋ねています。2019年も2020年も、各項目平均点が約4.2~4.4点の間にあり、比較的高い評価になっています。その差についても大きな差はみられず、**京都橘大学の教員は、対面と変わらず遠隔でも良い授業を行った**と解釈できます。

さらに詳細に分析するために、2019年と2020年に開講されている科目別の評価結果について、t検定（対応あり／両側）を用いて分析しました。すると「授業をまじめに意欲を持って受講した」、「授業外での学修方法を明確に示した」、「シラバスに沿って計画通り授業を行った」は有意差が認められました。真面目に受講した学生が増えたことは、回収率の低下に起因しているかもしれません。動画で何度も授業を見ることができるようになったことや、課題に取り組むことが多くなったことが学生の真面目さを引き出したとも考えられます。同様に課題を達成していくことが授業の参加度や、成績評価に直結するため、教員もより丁寧に授業外での学修方法を明示したのではないのでしょうか。シラバスについても、授業の遠隔化が決まった段階でシラバスそのものを修正する必要があったため、目下の状況に則したシラバスに書き換えられたことが要因と考えられます。

本データの分析だけでは、**対面と遠隔どちらが授業方法として良いかを結論づけることができません**が、2020年度前期のみの設問「この授業の課題は自身の学習成果を高める上で適切だった」は平均点4.02点、「この授業の課題へのフィードバックが適切だった」は、同4.01点となっており、他項目の平均点と比較して若干低い数字となっています。**課題の出し方やフィードバックの方法**については、2021年度以降も改善すべき課題と言えるのではないのでしょうか。

2021 年度の授業づくりにむけて

2021 年度も 2020 年度後期と同様、(前年の) 受講生数が 80 名未満の場合は対面授業、80 名以上の場合はオンデマンドによる遠隔授業が予定されています。いずれの場合でも 2020 年度の経験を踏まえ、よりよい授業にしていきたいものです。そこで、2020 年度を踏まえた 2021 年度の授業づくりのポイントについて私見をまとめました。すでに実践、あるいはお考えになっておられる先生もいらっしゃるかと存じますが、少しでも参考になる部分があれば幸いです。なお、文中にある LMS とは (ラーニングマネジメントシステム) の略称で、京都橘大学では 2021 年度より「ユニバーサルパスポート (通称ユニパ)」と「Teams」を使うことができます。

(1) 80 名未満の対面授業—反転授業のススメ

2020 年度の遠隔授業の経験を生かし「**反転授業**」に挑戦されてはいかがでしょうか。本来授業で行っている講義を、動画教材 (テキスト教材も可) として LMS から配信し、それを予習してくることを前提とします。そして授業では問題を解いたり、ディスカッションをすることを中心にします。そうすることで知識をただ記憶するだけでなく、理解し、活用するというより高度な認知的能力の発達に結び付けることが可能です。

反転授業を成功させるための授業設計のポイントについて澁川 (2021) は、①反転授業を導入する意図を学生に説明する、②事前学習時の導入 (動機づけ) を考慮する、③事前学習と対面授業の連関を意識する、④学生の実行可能性を見積もるの 4 点にまとめ、「いつ (事前学習・授業・事後学習) どこで (教室・オンライン) どのように (同期・非同期) 学ぶかという学びの時空間の選択と意図が肝要」と述べています。

(2) 80 名以上の遠隔授業 (オンデマンド) —授業・課題・フィードバックの連動

オンデマンドの遠隔授業を実施する際のポイントは、**授業・課題・フィードバックの連動**にあると考えられます。2020 年度の遠隔授業では「課題で疲弊する」といった声がクローズアップされましたが、授業アンケートや学生へのインタビューの結果を踏まえると、多いことよりも「課題が適切でない」ことに問題があるようです。適切な課題を出すためには、課題達成の意義を学生に伝える、授業内容と課題を密接に結びつける、課題負荷の大きさを考えて提出期限を設定する、提出された課題に対するフィードバックを行う、などの工夫が必要です。

特に課題に対するフィードバックは、学習意欲と学習成果の両方を高める効果があります。知識の記憶や理解を促すことが主目的であれば、マイクロソフトフォームズやグーグルフォームズの自動採点機能を用いれば、採点コストをかけることなくフィードバックが可能です。しかし、論述問題やレポート課題などに自動採点機能は使えません。かといって 80 名以上の学生 1 人 1 人に丁寧にフィードバックすることは不可能に近いでしょう。そこで私は、全体へのフィードバックを推奨します。例えば、学生が提出した課題の中から良い事例を匿名化して受講生に共有する、課題の達成度を見て全体的にできている点と改善点について次の授業資料 (動画やテキストなど) で伝えることなどが考えられます。学生は好事例を知ること、自分が提出した課題のできている点とできていない点について自覚し、次の課題達成に生かすことができるでしょう。また全体的に言えるポイントについては、自身にフィードバックされたような気持ちになるものです。できるところから結構ですので、お試しいただければ幸いです。

<参考文献> 澁川幸加 (2021) 「反転授業とはなにか—概念整理と授業設計時のポイント」

第 26 回 FD フォーラム第 1 分科会報告資料

教育開発支援センターでは、いつでも授業づくりに関するご相談をメールにて受付ています。

cesd@tachibana-u.ac.jp まで、お気軽にお問合せください。なお、パソコンやシステムの使い方などに関するテクニカルな部分のお問い合わせは、情報メディアセンターまでお願いいたします。

(文責：京都橘大学 教育開発支援センター 専任講師 西野 毅朗)